

---

# 透明な階段

葉崎あすか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

透明な階段

### 【Zマーク】

Z6527C

### 【作者名】

葉崎あすか

### 【あらすじ】

ファンタジーとは少し違うミステリー要素も入った話になっています。詳しくは本編を。

1

「まつたく、カーニャも人使いが荒いよ。……」

ライは今夜、魔法術に使う、うさぎを捕まえるため、トラップ（罠）を仕掛けている。

「えさをここに置いて、そして、縄をこうして……」「ぶつぶつと、ひとりごとを言いながら、作業を続けていく。

だが、なかなか作業は終わらなかつた。なぜならライは、とても不器用だつたからだ。

「…………」だんだん無口になつていくライ。

思い通りに上手くいかないので、腹が立つてきていた。おまけに、真夏の暑さが腹立しさを増幅させた。サンサンと照りつける太陽をにらみつけ、ライは、黙々と作業を続けた。

数時間後。

「よし、完成!」ライは、汗だくになりながらも、完成したばっかりのトラップらしき物を、満足げに見つめた。

「あとは、うさぎが、かかるのを待つだけ!」

だが、残念な事にライが大声で叫んでしまつたため、うさぎは危険を察知し、逃げていつてしまつた。その事を知らないライは、トラップらしき物の近くの茂みに隠れ、うさぎがトラップに捕まるのを待つていた。

日はトップリと暮れ、夜空に星が瞬き始めた頃。

ライはまだ、茂みに隠れていた。

「…………おかしいな」そのとき、ライの頭に激痛が走つた。あれが始まる直前だと、ライは思った。

『ライ! そんな馬鹿な事やつてないで、早く帰つてきなー珍しく客が來た』

2

ライが魔法使いになるために弟子入りしているカーニャからだつた。

そのカーニャの声が聞こえてくるのは、近くにカーニャがいる訳でもなく、電話をしている訳でもない。カーニャは、ライに魔法で頭の中に話しかけていたのだ。

『うう、頭が痛くなるから、やめてくれよ』ズキズキする頭を押さえながらライは魔法を使って返事をした。

『なに、ばかなこと言っているんだい！それはお前の魔法を受け止める力が、弱いからだろう！』

『わ、分かったから、そんなにおっきな声を出さないでくれよ』

『いいかい、早く帰つてくるんだよー』ブツンと切れた音がライの頭の中に響いた。

カーニャからの魔法が解けた音だった。とたんに、ライの頭痛が治まつた。

「本当に人使いが荒いよな…………」

苦労して仕上げたトラップらしきものを片付けながら、ライはそう呟くのだった。

2

マクニ（魔法使用許可区域）のはずれの森のおへり、ライと  
カーニャが住んでいた。

マクニの平地から、カーニャの家に行くまでは、約一時間は歩く、  
ふつうの山道ならまだしも、道とは言えない道を、一時間も歩く。  
このことを、知っているのか知らないのか、カーニャは約百四十  
七年前から、魔法を使った商売を始めた。

当然、客など、めったに来ない。

もし、ここマクニが、魔法がないといひだつたならば、多少は客  
が来るのかもしれないが、残念な事に、マクニに住んでいる人たち  
は、魔法が使える。カーニャに勝るものはいないが、通常、少しは  
使えば生活には苦労しない。よほどの事情がない限り。

「…………」

家の近くに来たライは、その場に固まつた。

なぜなら、家の前で、三つ編みにしたライと同じくらいの年  
(ちなみに、ライは、現在十三歳である) 少女が、立っていたか  
らだつた。

「あの……、もしかしてカーニャのお姫?」ライは、その少女に  
近づいて、聞いてみた。

そしてライは、その少女を見て、少し首をかしげた。山道を歩い  
てきたのなら、全身泥まみれになるのは、さけられないことだつた。  
だが、この少女は、少しも汚れていなかつたのだ。

「は、はいっ」突然、あわれたライに声をかけられ、返事をする  
少女。鈴を転がしたような声だった。

「なんで、家に入らないの?」

「あ、あの、カーニャさんにここで待つていい。と言わされたもの

で」少女は、服のはしを、強くにぎり、うつむき加減で言った。

少女は、麻のストンとした服に、七分丈のズボンをはいていた。マクニの子の典型的なファッショングだ。ライの服も似たようなもので、上の服の丈が少し長い程度で、あまり変わりはない。

「…………」ライはあきれた。久しぶりに来たお客なのに、何で中に入れないんだ……。「カーニャ！」ライは、木製のドアをバンッと開けながら、カーニャに向かつて叫んだ。

「なんだい。うるさいね」

カーニャは、直径一メートルはありそうな、大きなつぼを火にかけて、中身を木製の棒でかき回していた。そして、ゆっくりと振り向いた。だが、その手は、ツボをかき回すのをやめない。

「どうして、客を中に入れてやらないんだ！十年ぶりじゃないか」

「正確には、十一年ぶりだがね」カーニャは、片ほほで笑うと言つた。

「今、薬草を煮詰めているんだ。なかなか取れない貴重な薬草だ。客なんかに、邪魔されたくないね」そういうと、カーニャは再び、ゆっくりと顔をツボのほうへ戻した。そして、ぽつりといつ語つた。「それに、あの子は客じゃない」カーニャにしては、めずらしい小声だつた。

「…………客じゃない？ どうしてさ」

「あの子は、厄介なことを連れてくる疫病神だ。かかわらないほうがいい」

「…………それじゃあ、なんで、『客がきたから早く来い！』なんていつたのさ」

「そのときは、気づかなかつたからだ」

「…………」

3

「最近、奇妙な夢を見るんです」

「……ふむ」

「毎日、見るんです」

「……ほう」

カーニャは、少女ロゼという名前らしいの話を聞いていた。なぜ、カーニャは『疫病神』とまで言ったロゼの話を聞いているのか。

原因はライとカーニャにあった。

ライは、カーニャの家に入るとき、戸を閉め忘れてしまったのだった。ロゼは、およそ一時間近くも、カーニャに家の前で待たされていたので足が棒のようになってしまっており、早く中に入りたかった。といふ、二つの（カーニャにとっては）大変不幸な条件が、重なってしまったため、ロゼが、カーニャの家に勝手に入り込んで、いすに座つていてるという状況が生まれたのだった。幸いにも、カーニャの言つていた『疫病神』の話は小声で話していたので、ロゼには聞こえなかつたようである。

「それじゃ、その怖い夢を見ない薬草をやろう……」カーニャは、一通りロゼの話を聞くと、薬草が保管されている、となりの部屋へフラフラと歩いていった。よほど、ロゼがお気に召さないようである。

ライも、カーニャのとなりで、ロゼの話を聞いていたが、薬草で解決しそうな内容の話であつたため、なぜカーニャがそのような状態になるのか、まったく分からなかつた。

「どうしたんでしょう」ロゼが、突然ライに向かつて言つた。

「なにが?」

「カーニャさんです……。あんなにフラフラされていて、『病氣

ですか？」そのセリフを聞いて、ライは吹き出した。

「…………？」大笑いをするライを、ロゼは、首をかしげながら見ていた。

「ほら、これでよいじゃね?……」カーニャは、となりの部屋から戻つてくると、ライが、一度見たことのある薬草を持ってきた。

ちなみに、ライが薬草を見たとき、薬草の名前、その効果などを、

カーニャは説明した。だがライは、何一つとして覚えていない。

「あ、これは『アウラソウ』ですね。タシユさんに以前もらつたことがあります。でも、効きませんでしたけど……」ロゼは困ったように言った。

そのとなりに居たライは、やつとこさ薬草の名を思い出していた。

「ああ、そうそう。『アウラソウ』ね。はいはい」

カーニャは、ライに鋭い視線を浴びせてから、じり、つぶやいた。

「タシユの奴なんかと一緒にせんでくれ……。『アウラソウ』はそうじやが、カーニャ特製スペシャルスパイス配合じやから、威力は、すげくなつてある……」

「あ、そうですか。ありがとうござります」

ロゼは、丁寧に頭を下げる、家から出て行こうとした。

「困つたことがあつたら、またいつでも、来ていいですから」ライは手を振りながら言った。

「お前も行け」カーニャがぼそりと言つ。

「へ?」ライは耳を疑つた。

「薬草で、悪夢が見られなくなるのは、一時的なものじや。その、根本的な部分を解決せんと、いかん」

「カーニャが、行けばいいじゃないか

「お前が行け」

「…………」ライは、また思つた。

カーニャは、本当に人使いが荒い、と。



「本当に、申し訳ないです」先ほどからロゼは、大変申し訳ないことをしたと思っていた。

カーニャから、悪夢を見られなくする薬草を、もらつただけではなく、カーニャの弟子のライが、悪夢の根本的な原因を、解決してくれるというのだ。

なんて親切な人たちなのだろう。ロゼは泣きたいぐらい嬉しかった。

「とりあえず、シャルントじいさんのところに行つてみるか。あのじいさんは、もの知りだから、なにか教えてもらえるかもしれない

い

「は、はい」ロゼは突然話しかけられて、少し驚いた。ライは、先ほどから黙つて、ロゼの前を歩いていたからだった。

ロゼは歩くことが苦手だった。

地面の上に立つた一本の足で自分の体重を支えることが、どうしても信じられなかつた。といつても、ロゼの足が自分の体重を支えられないほどのものではない。物理的に、無理だと感じていたからだつた。

だから、魔法を使って、一センチほど宙に浮いて、進む。ロゼ以外の人は、そのような事をしないで、ふつうに歩く。よつて、足を動かさないで進むロゼは、マクニの街なかでは、大変に目立つた。それがいやだつたロゼは、足を動かすこととした。少し宙に浮きながら。

ロゼは、今までに、自分が歩いている姿を他人に見られても、気づかれたことがなかつた。

「ああ、なるほどね」ライが、突然つぶやいた。

「はい?」

思わず返事をしてしまつたが、自分に話しかけてきたのだろうか

と、ロゼは少し不安になった。

「うん、なんでもないよ、……そうかそうか」ライは、ロゼを少し振り向いて、笑った。

ロゼは、そんなライを見て、ゾクッとした。

振り向いたライの視線が、ロゼの足元へ、一瞬だが、そそがれたような気がしたからだ。同時に、ロゼの頭にチクッとした軽い痛みが走った。

思考を読まれた。ロゼはその一瞬にして理解した。

さすが、マクニが誇る大魔法使いカーニャの弟子だ。

おそらく、ライは、ロゼの足を見て、宙に浮いていることを確認し、そして、思考を読み、確信を持った。

ロゼは、つばをゴクリと飲んだ。

そして、魔法を解いて、自分の足で歩いてみようかと考えた。

「ああ、なるほどね」全てを理解したとき、ライの疑問は見事に解消された。

ライが、ロゼに最初にあったときの疑問。カーニャの家に来るとときは、泥まみれになるはずなのに、ロゼはそうではなかつたこと。ロゼが、宙に浮いていたからだつた。

おそらく、カーニャが、ロゼを気に入らなかつたのも、きっとそれがせいだう。ライは、そう考えていた。

振り向いた瞬間に、足と思考をライは見た。

微かだが、足が浮いていたし、そうする理由も分かつた。分かつたと同時に、ライは、背中に氷を入れたような感覚があつた。

また、ライも同じだつたからだつた。

ロゼと理由は異なるが、ライの足もまた、一ミリほど浮いていた。ライは、生まれたときから、手足が思うように動かなかつた。手は、生活には不自由しないものの、うきぎのトラップを作るなど、細かい作業を行うには、不可能に近かつた。また、足は、手よりもひどく、歩くと足全体に、チリチリとした痛みが走つた。

心配したライの両親は、マクニーの魔法使いカーニャに、ライを預け、自分の魔法力を高めて、自分の病氣を治すようによく考えた。

負けず嫌いのライの性格と、カーニャが与える試練（ライに言わせれば『人使いが荒い』となるが）によつて、ライの手足は徐々に回復し、手は、ウサギのトラップが時間はかかるが作れるほどに、足は、魔法で浮かせれば痛みがなくなり、走れるまでになつた。ちなみに、ロゼが一センチ、ライが一ミリ。この九ミリ差は、魔法力の差とも言えよう。

「ああ、着いた」

歩き始めて、およそ六時間。ライとロゼは、一度も休むことなく、マクニから程遠い、リン（縁育成区域）に着いた。

ライとロゼが尋ねる、シャルントが住むところである。

先ほど、カツコ付けで説明したが、マクニとは、魔法使用許可区域のことである。だが、使用許可と言っているが、マクニから離れて、リンやクウクなどのほかの区域に言つた場合でも、魔法は使え、規則を破るなどということはない。ただ、リンなどの、ほかの区域から生まれた人は、魔法が使えないだけである。

リンの住民は、魔法の代わりに、特別な力が備わっているのだが……。それはのちのち、明らかになるだろう。

「遅かったのう」

ライは、木製のドアを叩こうとした。が、シャルントに先を越された。目の前のドアが開いたのである。ライは、ドアの端にスッとよけた。すると、シャルントが、ゆっくりとした歩きで出てきた。シャルント タノル・シャルントは、リンの森の番人である。と言つても、リン全体が森なので、区長の役割もしている人物である。

小柄に白いひげ、いつもかぶついている、真っ赤な三角帽は、『白雪姫』の七人の小人を連想させる。

「いつもながら、絶好調ですね。『先読み』は、ライが、二カツと笑いながら言った。

「『先読み』……」ロゼは、リンの土地を始めてふんだが、『先読み』のことは知つていた。

リンは全体が森なので、天気に影響されやすい。 台風が来れば木々は倒れ、雨が降らねば木々は枯れる そのことを事前に知るために、先を読む力 『先読み』が、リンの住人に備わったという説がある。

魔法でも、先を読むことはできるが、『先読み』は、それをはる

かに上回る力があった。

「お主たちの、言いたい」とは良くわかつどるが、今は、そんなことに付き合つてらんのじや。あと一ヶ月後に、大きなあらしがくるでの。その対策を立てなくてはならん」

「ああ、そうですか……。それじゃあ、失礼します」

ライは、軽く頭を下げる、その場から立ち去ろうとした。

「待て、役に立つかどうか分からんが、こやつを連れて行け」  
出てきたのは、十歳くらいの男の子。短髪に鋭い目。耳には、緑色に光るイヤリングをしていた。

「わしの孫じや。五年なら貸してやつてもええ」シャルントはそうこうと、急ぎ足で森の奥へと去つていった。

「……五年?」五年とはどうしたことなのだひつ。ロゼは少し不安になつた。

「君、名前は?」ライが、微笑みながら聞く。いつも笑つている人だとロゼは思つた。

「……シャルゴ」ロゼは想像していたよりも、高い声だったのでびっくりした。

「僕はライ。ひつちはロゼ。よろしくね」

「……うん」

シャルゴは、口クリと音がしそうな動きでつなづいた。

「すごいですよね、リンの人たちば。つらやましいですよね。未来が見えるなんて」

ロゼは、クウク（飛行研究区域）に行く、道を歩きながら、何度もそう言つていた。

「うん、でも、そうでもないらしいね。さつき、シャルントじいさんも言つていたけど、『先読み』は、最大五年までらしいからね」

「ああ、そうなんですか」

ロゼは、先ほどのシャルントの最後の言葉が、ずっと引っかかる

ていた。自分の悪夢の根源を見つけるまでに五年もかかるのかと、心配になつたが、シャルントの言葉は、孫を心配したことだつたのだ。自分が見える五年間は、孫に何にも危険が及ばないから、役に立つから連れて行けということだったのだ。

「あと、五年以内だつたら、自分の死も見えるようだからね。先が見えるというのは、あんまり良いことじやない」ライは、微かに顔を暗くしながら言つた。

「ああ……」

ロゼは、深く息を吸つた。

リンの人気が、課される運命。　　自分の死が見える。すくなく辛いことなのだろう。見えた後の五年間、どう過ごすのだらう。ロゼは、考えただけで、胸がはち切れそうになつた。

「……あのさ」シャルゴが、突然口を開いた。

「オレ、なんで君たちについていつているのか、分かんないんだけど。じいちゃんみたいに『先読み』が強くないからさ、ちゃんと説明してくれなきやわかんないよ」

「ああ、そうだよ。僕も、カーニャにロゼが、説明しているときには、ちょっと上の空だつたからさ。あんまり覚えていないんだよね。……あれ？ 何で泣いてんのさ、ロゼ」

「え？」

ロゼは、知らない間に、大粒の涙をこぼしていた。

ロゼは、闇の中にいた。  
自分も認識できないほど、闇だつた。  
声を出してみる。何も聞こえなかつた。  
それ以前に、ロゼ以外に誰も居ないのだから、声を出す必要がないのかもしれない。

歩いてみる。

何か障害物があるのか、歩きにくかつた。  
ドロツとしたゼリー状の、空氣。  
これが、障害物の正体……なのかもしれない。  
怖くはなかつた。  
何も思つていなかつた。  
それが、逆に怖いのかもしれない。  
今、自分は何も考えていなかつた。  
そのとき、幼いときに考へ、そして、封鎖した考へが、一氣によ  
みがえつた。

ロゼは、小さい時から、いつも何かしら考へていた。  
あるとき思つた。考へないという状態は、どうこう事だらう、と。  
実際にやつてみようとした。が、考へないようにと考へてしまつて、  
考へないといふことは出来なかつた。  
その次に、どうして出来ないのか、と考えた。  
長い時間考えたあげく、答えが出た。  
出たときに、ゾツとした。

なんてことを自分は考へているのだろうか。  
その答えとは、考へることとは、生きている証拠なのだと「ひと。  
眠つてこると考へても、夢を見る。

つまり、考へてゐるのだ。

だから、考へないをするには、生きる自体をやめる。つまり、死ぬことだった。

ゾクッとしたと同時に、ロゼはこの疑問に對する考へをやめて、次に考へることを探した。

ロゼは思つた。

自分は今死んでいたのだろうか、と。

闇の中で、幼いときの恐ろしい考へがよみがえり、ロゼは、急に怖くなつた。

そのとき。

「……」

何かが聞こえた。

小さすぎてよく聞こえなかつたが、確かに、何かが聞こえた。

「……」ほら、また。

ロゼは、自分以外に、誰かがいると安心した。

そして、恐らく音の主がいるだろう方向へ、重い空氣の中を進んだ。

「……チリカ」

「え?」ロゼは、思わず聞き返した。と同時に、さつきまで、聞こえなかつた自分の声が聞こえることに気がついた。

「……チリカを探して」

「チリカ? ……何、それ」ロゼはつぶやく。聞きなれていの自分

の声に多少の安心感が得られた。

「チリカを探して。チリカを探して」声は、だんだんと大きくなつて、反比例のようになんかが小さくなる。

「……」ロゼの安心は、吹き飛ばされそうだった。

ずっと、声のするほうへ歩き続けていて、なかなか着かない。それなのに、声はどんどん大きくなる。不安も大きくなる。そして、反比例のようになんかが小さくなる。

「チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を  
探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ  
力を探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を探して。  
チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を探し  
て！」

ロゼは耳をふさいだ。

安心はもう、台風が過ぎ去り、雨雲が無くなるように、きれいサ  
ッパリと、無くなっていた。安心が零になつたら、さつきの反比例  
と同じく、不安がロゼをおおいつくす。

耳をふさいでも、効果はなかつた。

頭全体が、耳にでもなつたかのように、その声を、受け止めてい  
た。

「チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を  
探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ  
力を探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を探して。  
チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を探し  
て。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を探  
して。チリ力を探して。チリ力を探して！」

「もう、やめて！」

急に静かになつた。

ロゼは、気を失うように……眠りから覚めた。

8

「それが、悪夢なの?」ライは、ロゼの顔をのぞき込むよつこじて、聞いた。

「……はい」ロゼは、すうとうつむこたま、しゃべっていた。

「…………ふーん。シャルゴはどう思う?」

「何が?」シャルゴは、足元の石を見ながらつぶやく。

「何がって……、チリカはなんだらうね。とか…………まあ、そんなどこの

ライは、顔をしかめながら言った。

「チリカはなんだらうね」シャルゴは、顔を上げながらつぶやいた。

「…………君、ふざけてるでしょ」

「うん」

「…………カーニャがいたら、このクソ坊主とか言つていただらうね」「言わないでしよう。カーニャさんは、いい人ですから」ロゼは、

ニコリと笑いながら言った。

「…………」ライは、ロゼの笑つた顔を始めてみた気がした。

「どうかしました?」

「…………いや、とにかく、それが全部なんだよね。悪夢の話は」

「ええ」ロゼは、うなずいた。せつとの笑顔はすでに消えていた。

「…………それを毎日見る」シャルゴは、ぼそりと言つた。

「うん、それを今、聞こうと思つたところ」

恐らく、『先読み』を使ったのだろう。ライがロゼに『毎日見るのか』という質問をしていく未来をみたのだ。

ライはうなずいた。

なるほど、時間の短縮という訳か。いかにもシャルゴらしい。

「オレのこと、何も知らないくせに」

「ほり、また言おつとじていたことを言われた。

ライは、なぜだか面白くなつてきた。

「やつから、何を話しているんです？」

口せば、首をかしげた。

いつの間にか、夜になっていた。

三人は、まだリンから抜け出せていないため、野宿をすることにした。

「ここから、クワクは遠いんですか？」ロゼは、焚き火の炎を見ながら言った。

「うん、かなり歩くことになるね。魔法で飛んで行つてもいいけど、シャルゴは飛べないだる」

「オレは、足手まといかよ」フンと鼻を鳴らすシャルゴ。

「いや、君は役に立つからね。足手まといには、絶対ならないよ」

「でも、オレ、飛べないし」

「リンの住人だから、当たり前だよ。今は、飛ぶことよりも、『先読み』の方が、重要な気がするんだ」

「…………」ライには分からぬが、シャルゴは沈黙した。分からぬので、ライも、沈黙した。

ロゼは、何故一人が、急に押し黙ったのか分からなかつたので、沈黙した。

ふしぎな沈黙がその場を包んだ。

ヒュオ

。

そのとき、冷たい風が、三人のほほをなでた。  
そして、「ロロロロ」という音。

その音を聞いて、シャルゴはすばやく立つた。

「あらしが、来る！」

シャルゴは、あたりを見渡すと、ライに向かつて言つた。

「もうすぐ、やつて来る！オレ、じいちゃんの手伝いしてくるから、ここにいて！」

「僕も行くよ！」ライも立ち上がる。が、時すでに遅し。シャル

『では、それじゃありしのよひで、森の中に入つていった。

「……………どうして？」

だんだんと強くなつてくる風に田を締めながら、口せせつぶやいた。

た。

「やひ、リンの『先読み』では、あらしが一ヶ月後のはずだつた。なのに、今来ている。リンの『先読み』が間違つていたのか？

いや、そんなはずは……」

ライは、森を見すえながら、つぶやいた。

「とにかく、ここについては、危険です。近くの家に非難しましょ

う  
「うそ……」

10

そのあらしは、リンの歴史に名を刻むほどの勢いだつた。

木々が生い茂るリンが、一晩で、荒地と化した。

樹齢何千年もの木々がたおれ、枯れていつた。

行き場をなくした動物たちが、死んでいつた。

家のほとんどが全壊状態になつた。

今まで、リンの端から端まで、木や家で見わたせなかつたのが、見わたせるようになつた。

いや、ほとんどのリンの住人は、その状況から目を伏せた。見ることは出来るが、見ようとしなかつた。

ロゼは、腕に軽い傷を負つていた。魔法で自分の身は守つたものの、それを打ち破るほどの威力があつた。

一方ライは、自分の身ばかりではなく、リン全体の住民を魔法で助け、結果的に、ロゼの傷だけで、全員が無傷だつた。

ロゼは、自分も守つてくれたらよかつたのにと思ったが、そんなに人にはまつてもらうのも好きではないので、黙つていた。

「なぜじや…………」シャルントは、さつきから頭をかきむしっていた。

ロゼには、シャルントが、さらに小さくなつたように見えた。

その老人に、かける言葉をさがしたが、見つけることは出来なかつた。

「突然、ライが、呪文を唱えはじめた。

それはロゼが聞いたことのないものだつた。

ライは、目をつぶり、手を下にして、空に向かつてブツブツと言つていた。

まるで、宇宙人を呼び寄せるかのようだつた。が、そのような怪しさは皆無だつた。

ロゼは、ライの『呪文の声』を始めて聞いた。

それは、聞いているものの感覚をマヒさせるような、美しさがあった。

『呪文の声』とは、普段の声とは違く、これから術をかけますよと、『術の精霊』に伝えるための声であった。普段の声でやると、まったく術はきかない。

ロゼは知らなかつたが、カーニャほどの魔法使いになると、普段の声が『呪文の声』にすることができる、わざわざ魔法を使って、声をかえる必要はないのだそうだ。

ちなみに、ロゼの『呪文の声』は、普段の声とはまったく違い、地獄のそこから聞こえてくるような声であった。

ライは、その美しい声で、五分ほど呪文を唱えた。

そこにいたリンの住人は、その美しさに酔いしれ、リン全体が元の緑が生い茂る森に戻っていることに気がつかなかつた。

「何故、怒っていたんでしょう。シャルントさんは感謝しているようでしたけど」

ロゼは、微かに怒った顔を見せながら、ライに言った。

「当たり前だよ、リンの『先読み』が当たらなかつた上に、マクニに奴に、元通りにされちゃつたからね。リンは、他の区域よりもプライドが高いから、自分たちの信じるもののが、なくなつたんだよ。それに、シャルントじいさんは、リンの長だ。区域に一つあるといわれる宝玉を守る長だ。プライドが傷つけられたとしても、元に戻つたんだ。自分より、リンを一番に考える それが長だ」

「そうですか。……でも、何でライさんは、分かつていて、元通りにしたんですか？」

悔しかつた。と言えば、この低い魔力の子は納得するだろうか。

ライは、ロゼの質問に答えないで、考えた。

いや、無理だな。

ライは、すぐに答えを出した。

ロゼだけじゃない。誰にも分からぬだろ？

なぜつて、自分でも分からぬのだから。

あのとき

リンがあらしで、全壊状態だつたとき。

ライは、ライではなかつた。

異常なことがあると、パニックになつてしまつ。

そして、さまざま感情がうごめき、自分が思つてこることと、反対のことをしてしまう。

自分が自分ではなくなるのだ。

その状態がライの、一番嫌いな状態だつた。

だから、異常なことが起きても正常に保とつとした。反対の自分

を外に出さないよつにした。

出来なかつた。それが、ライは、とつても悔しかつた。

カーニャにはかなわずとも、ライは、魔力は相当なものを持つている。

手足が思つように動かない。

それじゃあ魔法をかけよう。

体を少し浮かせよう。

皆に気づかれないようにしよう。

何でも出来た。

出来ないものはないと思つていた。

魔法があれば、これさえあれば、何でも出来る。

それが、これだ。

あらしが来て、リングめちゃくちゃになつた。

何故、未然に防げなかつた？　何でも出来るんじやなかつたのか

。

「ライさん、ライさん」ロゼがライを呼んでいた。

「なに？」ライは、少しふつきりぼつに、答えた。

「これからどこに行きます？　シャルゴくんは、帰つてしまいま  
したし……」

そう、シャルゴは、両手に涙を浮かべて、ライをにらみつけて去  
つていつたのだ。

「…………」

もう、ライはロゼの悪夢を解決することができ、いやになってきた。

『そんなこと、言つもんじやないよ』ズキリといつ頭の痛みとと  
もに、カーニャの声が、ライの頭に響いた。

『そんなこと言つてもさ、もつ、どこ行つたらいいか分かんない  
よ』ライは、魔法を使って、カーニャに返事をした。

そして思う、カーニャは、ライの行動と思考を今まで全部読んで  
いたのだろうか。その可能性は十分にありえた。ライは、すこしム  
ツとした。今度は、思考を読まれないように訓練しなければいけな

いな…………。

『…………クウクに行け』数分の沈黙の後、カーニャは、言った。

『…………クウク』

『そうじや、そしたら、全てが分かるじゃね。…………シャルゴが

いなくても、何とかなるじゃろつて』

「なぜ、最初からカーニャさんが、来てくれなかつたのでしょうか？全て分かつているようすでしたよな」そのロゼの言葉をきいて、ライは、目が飛び出しているのではないかと思つた。

「え？なんで、ロゼが知つているの？」

「…………だつて、カーニャさん、私にも魔法で話しかけてくれましたから。ライさんの声も、聞こえていましたよ」

「ああ、そう…………」

それは、絶対にありえない。

ライは返事をしながらそう思つていた。魔法で話をするというのは、送信者一人に対して、受信者一人であり、二人で会話をするものだ。三人でなんて、いくらカーニャの魔力が強いといつても、それは不可能である。

だが、ロゼは、ライとカーニャの会話を知つていた。

ライは考えた。それは、ロゼが魔法でライの思考を読んでいたからだ。

ロゼは、魔法を使つた後に出る匂いがなかつた。いや、匂いすらなくとも、意識的に、魔法を使つていれば、何らかの変化が見られるはずだ。

だとしたら、無意識のうちにやつっていたのか…………。

もしかしたら、ロゼは、そういう魔力を持っているかもしけない。

ライはそう思つていた。



「チリカ？うん、知ってるよ。海に住む神のことでしょう」  
まさか、こんなにも早く、チリカのことが分かるとは、思いもし  
なかつた。

ロゼは、決して比喩ではなく、開いた口がふさがらなかつた。  
隣を見ると、ライも、同じ状況にあつた。

クウク（飛行研究区域）は、その名の通り、『飛び』を得意  
とする、背中に蝶のような羽の生えた住民が、あちこちに見え  
る区域だつた。

ロゼとライは、きれいな濃い青色の羽を持つ住人を捕まえて、さ  
っそく聞いてみたら、この通り、口がふさがらなくなつてしまつた  
のだ。

濃い青色の羽を持つ少女は、キリアといつた。ロゼとライより、  
少し年上のようだつた。

「でも、それって、おどき話の中で登場する神でしょ。実際にい  
るわけないじゃない」

「お、おどき話ですか……」ロゼはそつそつぶやくと、聞いていた  
口を閉じた。

「そのおどき話、聞かせてもらいますか？」ライは、微笑みなが  
ら言つた。

「別にいいけど…………よく覚えてないなあ」キリアは、羽と同じ  
色のショートカットの髪をかきむしりながら言つた。

「家になら、その絵本があるかも。来る？」

「はい」

ロゼとライは、同時に答えていた。

「何にもないですね……」

ロゼは、キリアの家に行く途中、周りを見渡しながら言った。

クウクの土地を取り囲むようにして大きな家が十一軒あり、クウクの中心に大きな木が三本、トライアングルのようにあるだけで、ほかには何もない、平地が広がっているのみだった。

「当たり前、私たちは空を飛ぶんだから、何もないほうが、着陸のときに便利でしょ」

「でも、あの三本の木はなんですか？マクニでは見たことのない木だよね、ロゼ」

「はい……、リンでも見かけませんでしたけど」

「そりや そつそ、あの木は、クウクでしか育たない木だからね。上に向かつて風を起すのぞ」

「風……？」

キリアはうなずくと、木のてっぺんを指差した。

「あの辺から、風が出る。小さい子なんかは、まだ風に乗つて空を飛ぶことは出来ないから、あの木で練習するのさ。風がまつたくないつて日には、大人だって使うときもある」

「へえー、そうなんだ」

しばらく、歩くとキリアの家に着いた。

「ここは、わたしの家族の家だけじゃない。ほかの家族も一緒に住んでいる。ほかの十一の家も全部一緒だよ」

「マクニと全然違うなあ」

キリアは、二階の（この家は五階建て）部屋に着くと、ブツブツと独り言を言いながら、絵本を探し始めた。

その部屋は、書斎らしく、一メートルぐらいの天井までの高さの本棚が壁一面に広がっていた。

古本の香りがする。ロゼは、この香りが好きだった。

「僕、この臭いはなかなか好きになれないな」ライが顔をしかめている。

人の好みはいつも違うものかと、ロゼは感心していた。

「うーん、ないなあ」キリアは、羽をせわしなく動かしながら、本棚を行ったりきたりしている。

「あの、題名って分かりますか？私たちも探します」

ロゼは、そうこうと、『呪文の声』 地獄のそこから聞こえてくるような声 で自分自身に術をかけると、透明な階段を上るかのように、一步一步、空中にいるキリアに近づいていった。

「『海の中の住人たち』だったと思つ」キリアはロゼが近づいてくると言つた。

「魔法で探せばいいんじゃないの？」

ライは、音もなくキリアとロゼに近づくと、また、あの美しい『呪文の声』を発した。

すると、下のほうにある一冊の本が、スゥーッと音もなく浮かび上がり、ライの手に収まった。

その本は、確かに『海の中の住人たち』であり、表紙には、カルしたブロンド色の長髪の女性が美しく描かれていた。

「この人が、チリカ…………？」

13

むかしむかしのことでした。

海底には、さまざまの区域の住人がすんでいました。  
マクニ、リン、クウクをはじめとする五十もの住人が、一つのカリトという区域となつて、すんでいたのです。

リンは木ではなく海藻を育て、クウクは海水の中を鳥のように泳いでいました。

それはそれは幸せな生活でした。

ある日のことです。住人たちは、ふしぎなことに気がつきました。海には、水があるが、では、外の太陽が直接照る地面では、どうなっているのだろうか、と。

そうなのです。カリトの住人たちは、海以外の世界をまだ見たことがないのです。

カリトの住人は、好奇心が旺盛でした。

気になることがあれば、すぐにでも飛んでいって、確かめてみたい。と思つていました。

そこで、みなで外に出てみようということになりました。  
ところがそれを、カリトの長、チリカが止めました。

外に出てはいけない。外に出てはいけない。

それしか、チリカは言いませんでした。

カリトの住人が何度も聞いても、首をたてには振りませんでした。  
カリトの住人は、一時期外出することをあきらめましたが、一度気になりだすと、住人の意識は、外の世界へと飛んでいきました。

クウクは、もうろうとして、サンゴ礁に頭をぶつけ、リンは、海藻をせんていしようとして切り裂き、マクニは、砂の城を作ろうとして、失敗しました。

カリトは大変なことになりました。

カリトの住人は、ガマンが出来なくなり、チリカの忠告も聞かず  
に、海から外へ、飛び出していきました。

深い海の奥底で暮らしていたカリトの住人には、太陽の光はあまりにもまぶしすぎました。

その光で、ほとんどの者の目が、視力を失いました。  
海水から酸素を得ていたカリトの住人は、ほかの方法で、酸素の  
得る方法を知りませんでした。

酸素不足で、海に戻ろうにも、目が見えないので、もう、  
どこが海だが分かりませんでした。

数え切れないほどのカリトの住人が砂浜で、息絶えました。  
海には、クウクがぶつかったサンゴ礁、リンが切り裂いた海藻、  
マクニが失敗した砂の城と、チリカが残されました。  
チリカの悲しみは、それはそれは深いものでした。  
チリカが、本当のこと説明したところで、カリトの住人は理解できただらうか。

「冗談を言つているとばかり、思うのではないでしようか。

以前あつたその思いは、チリカには、なくなりました。  
なぜ、きつく止めることができなかつたのか。  
分かつてゐるのに、なぜ言わなかつたのか。

その疑問が、チリカの頭の中で、渦巻きました。  
チリカは、リンの区域の住人でした。

『先読み』は、誰にも負けない自信がありました。  
ですが、チリカは、カリトの住人には秘密にいていました。  
カリトの長がリンと知れたら、リンは得意になってしまい、ほか  
の住人よりえらいんだと思い込んでしまって、区域差別が起こるの  
ではないかと、心配したからでした。

今となつては、住人がいないのですから、差別など起こるはずが  
ありません。

言つべきでした。

自分はリンの住人だと。そうしたら、カリトの住人は信用してくれ、こんなことには、ならなかつたはずです。

なぜ、そのことが『先読み』で知ることが出来なかつたのか。チリカは、自分の能力の中途半端さに、腹が立つてきました。誰にも負ける自信がなかつた『先読み』で、自分が負けたような気がしました。

チリカは、悲しみのあまり、数が月の後、暗い海底で、息絶えました。

その、チリカの魂は、あまりにも住人を思う気持ちから、神となりました。

チリカは、今も、自分がしたことを悔やみながら、海の平和を守つてゐるということです。

14

「はー、なかなか暗い話ですね」ライが感想を語る。  
キリアは、羽をパタリと動かして、それに応じた。

「作り話だらうけど、ここまで悲しくせんでもねえ」

「どうして作り話だと、分かつてているんです?」ライが小首をかしげた。

「そりゃそうさ、作者は、シェンター・カローラ・サクリ（文字作成区域）の絵本作家が書いたものだからさ」

「……シェンター・カローラ?」ライは、聞いたことがなかつた。そもそも、ライは本というものをあまり読んだことがない。

「…………わたし、この話、どこかで聞いたことがあるかも知れな  
いです」

突然、黙っていたロゼが口を開いた。

「ええ?」

ライは、耳を疑つた。と同時に、嬉しくなつた　　とうとう、ロゼの悪夢の正体を突き止めた!

「分かつたよ、ロゼ。ロゼは子供のころ、この本を読んだんだろう。小さい子には、この話は怖かつたのかもしない。カリトの住人たちに何も教えなかつたチリカを、とても恐れていたんだ。海に住む者が、地上に出たときの恐ろしさを知つていたのにわざと見殺しにしたんだつてね。そして、数年たつて、この本を読んだことを忘れてしまつたけど、「チリカがとても怖い」ということだけは、印象深くて、記憶の奥底に眠つていたんだ。それで、あるとき、奥底で眠つていた、記憶が呼び戻されて、悪夢として蘇つたんだ!」

ライは、興奮して、ペラペラと話した。

「そう、ロゼの悪夢の原因は、この本にあつたんだ!」やつたぞ。  
これで、もうおしまいだ　　そう思つていたライの、すがすがしい

心に、一本の矢が刺さつた。

「それは、ありえません。わたしは、今まで数多くの本を読んできましたが、すべてを記憶しています」

「…………はい？」

「あのさあ」

困惑しているライの隣で黙つて聞いていたキリアが、これまた困惑ぎみに話した。

「わざわざから、悪夢とかつて話してたナビ、なに? それは」

「ああ、それは」

ライは、ロゼの悪夢のこととを説明した。

キリアはフムフムと聞きながら、話の途中で「はあー」というため息や「ロゼはたいへんだなあ」などと、いちいち感想を言つので、説明するのにえらく時間がかかった。

「なるほどね。それで、そのライの解釈か……。だけ、ロゼは全部記憶しているぞ、と……」

キリアは、ウーンと腕ぐみをしながら、なにやら考え始めた。

数分後。

「よし。今から、テストをやろひ」

唐突に言われたその一言に、ライとロゼは困惑した。

「ロゼは今まで読んだ、本をなるべく古い順から言つてくれ。ライは、その本を探して、わたしに渡す。またロゼに、作者と出版日を言つてもらひ。あたしが、持つている本と、ぴったり合えば合格だ！」

な、ぜ、こんなにもキリアは楽しそうなのだろう。そして、合格とは……。といふ、ロゼとライの疑問は無視して、キリアが、「ああ、早く早く！」と、ロゼをせきたてていた。

ロゼは、軽く手をつぶると、頭の中の引き出しから、今まで呼んできた本の詳細のリストを取り出した。

「まずは、『風の支社』とこう本です。三才のときに初めて読んだ小説です」

「ライ、探して」キリアは、ライが魔法で探し出した本を、手に持つた。

「　　はい、作者と出版日は？」

「……マサラ・コンシホール。サクリ暦二六一五年の五月二十日出版です」

「　　正解。…………すごいねえ。感心する」キリアの感嘆を無視し、ロゼは先に進めた。

「　　今、明日『作者は、サラク・ミタコラーヨ。出版は、サクリ暦二六一五年の八月二十八日……』です」

「正解　読んだ年は？」

「…………七才のとき…………です」

「フーン。本当に、すごいねえ。　　ねえ、ライ

「は、はい……」

ライは、本棚に、もたれかかってボーとしていた。  
魔法を使って、疲れたのだろうかと、ロゼは思った。

「ひとまず、合格。これで、ロゼの記憶力は証明された」  
キリアは、ライにニッコリと微笑みかけた。

「ライの解釈ではなかつたよ」

「まあ、そうですね」

ライは、ため息をついた。

「とりあえず、サクリに行つて、『海の中の住人たち』の本の作者に会つてきます」

「ああ、それがいいと思うね。なんなら、わたしも行つてあげようか？ひまだし。一を聞いたら十まで知りたいし」

キリアは、目をキラキラさせながら言った。本当は、行きたくてたまらないのだろう。

ロゼも、本好きなら一度は行つてみたいといわれる、サクリに行けることこゝ、胸を踊らせていた。

ライは、キリアの手を強く握るといつぱつた。

「ぜひ、一緒に来てください」

ライの熱心な顔の裏を、ロゼはまだ、知る由もなかつた。

サクリに行く途中、キリアの発した言葉に、ロゼとライは、またしても口を開けることになつた。

「あのさあ、さつきから思つてたんだけど、どうしてライの魔法でロゼの魔羅の正体を、見つけようとしないわけ？」

「そうだった！」ビックリマークが百個くらしつきそうな勢いで、ライが言った。

一方ロゼは、ロゼばかりが目まで見開いていた。

今までたくさんのことがありすぎて、こんな簡単な方法を、忘れていたことをキリアが教えてくれたことに、ロゼは感謝した。

「……はは、もうすでにやつてはいるのかと思つた」

キリアは苦笑した。

16

「それじゃ、ロゼ、そこの石に座つて」

ライは、ロゼが石に座るのを見届けてから、静かに目をつぶつた。キリアは、自分にも魔法がかかつたら怖いからと、木の陰に隠れていた。

そんなこと心配することないのに、ライはそう思つた。

「

『呪文の声』で、ライはロゼに術をかけた。  
目をつぶつた真っ暗な頭の中で、ライは呪文を唱える。  
そして、ロゼの頭の中に入り、原因を探つていく。

十分ぐらいたつたあと、ライは静かに目を開けた。  
のちにキリアは、木の陰から見ても分かるくらい、へびのよくな  
恐ろしい目だつたと、語つた。

ロゼは、目をつぶつていた。

まるで、眠つているかのように安らかな顔だつた。

ロゼは、フツと目を開けると、「もつ、終わつたのですか?」と、たずねた。

ライは、静かにうなずくと、その恐ろしい目をロゼに向けた。

ロゼは、一瞬たじろいだ。が、すぐに微笑んだ。

「分かつたのですね? 悪夢の原因が」

「…………うん」

そう、ライは、知つてしまつた。

分かつてしまつた。

ロゼの悪夢の原因が。

そして、ロゼの正体が。

「行こう」

ライは、静かに言った。

「サクリヘですか？そこに、わたしの悪夢の原因があるのですか？」

ロゼは何も知らないのか。本当に知らないのか。と、ライは思った。

「教えてください。わたしの悪夢の原因を」

ライは、首を横にふった。

「どうして、教えないのさ。元はと言えばこれは、ロゼの問題だらう。どうして、隠す必要がある？」

いつの間にか、木の陰から帰ってきたキリアが、言つ。もつともだ。

ライは思った。

もつともだ。だけど、『ればっかりは……』。ライは、キリアを無視して、言つた。

「行こう。カリトへ」

17

キリアは、さきほどから機嫌が悪かった。

ロゼは、前にキリアが言つていた「一を知つたら十まで知りたい」という言葉は本当だつたんだと、思つていた。

そして、前に読んだ本で、クウクの住人は学問への好奇心がほかの区域に比べて、はるかに高いということを思い出していた。

その証拠に、キリアの家のたくさんの中たちが物語つていた。

「教える、ライ」

言葉使いもどんどん悪くなつてきている気がする。早く、なんとかしなければと、ロゼはハラハラしていた。

それにかまわず、ライは、無言でロゼとキリアの前を歩いていた。

「…………ライさん？」ロゼは、少し早歩きして、ライの顔をのぞきこんだ。

「…………なに？」ロゼは、ライの表情を見て、「いいえ、なんでもありますん……」と、引き下がつた。

しばし、三人は無言で歩いた。

ロゼは、まわりの景色を見た。

細い一本道だった。

まわりには、木が生い茂つていて、まるで、トンネルのようになつていた。

葉と葉の間から、太陽の光がこぼれている。

地面には、ロゼの知らない薬草がいっぱい生えていて、木の根も顔を出していた。

油断すると、足を取られそうになる。

この道が、海へつながる、ただひとつの中道だった。

とても涼しく、気持ちのいい朝だった。

昨日は暗くなつたので、キリアの家に泊まり、朝早くから出発し

た。ライは、泊まることを済つた。早く、海に行きたかった。海に カリトに何があるのだろう。ロゼは、とても楽しみだつた。

カーニャに薬草をもらつてから、今まで、一度も悪夢を見なかつた。やはり、大魔法使いがくれたものは効果絶大だったのだ。だが、いくらカーニャの薬草とはいえ、心に残るモヤモヤまでもなくすることはできなかつた。

それを、ライが知つている。

カリトに行けば、分かるのだろうか。

この得体の知れない恐怖を、ぬぐいきることが出来るのだろうか。

「さあ、着いた」ライの言葉で、ロゼは顔を上げた。今までの狭いトンネルから一変。どこまでも続く、海。そして砂浜が広がつていた。

「ここで、カリトが息絶えたんだ……」

キリアが、しみじみと海を眺めていた。

「ええ……そうですね」ロゼも、海を見た。

「これから、海に入る。カリトは海に住んでいたのだから、住居跡は残つてゐるはず。それを探す」突然のライの言葉に、ロゼとキリアは、とんでもないと首を振つた。

「わたし、泳げません」

「あたしも……羽がぬれたら大変！」

「キリアさんは、ここで待つていてください。……………ロゼは、魔法をかけねばいいじゃないか」

「ああ、そうか……」

ロゼは納得すると、自分に魔法をかけ始めた。

体全体が、ぬれないうように。それと、海の中で息が出来るようになるべく疲れないように。

「待て。あたしも行く。――を知つたら百まで知れ

あたしのポリシー！あたしにも、魔法をかけて」十から百に増えたような気がするが、ロゼは黙つていた。

今なにか余計なことを言つと、キリアにかみ付かれそうな気がしたからだ。

「でも、キリアさん、さつき口ぜに魔法をかけたとき、木の陰に隠れていたじゃないですか。怖いのではなかつたのですか？」

キリアは、ライの言葉を無視して「早く早く」とせきたてていた。

「しうがないな」ライは、軽くため息をつくと、自分とキリアに魔法をかけ始めた。

三人は海の中に入つていた。

「わたし、海つて初めて。すごいなあ」執拗に感心しているのはキリアだった。

キリアは、羽があるので、ほかの二人よりも、ゆっくりと進んでいた。

「ね、ライとロゼは、海は初めて?」

「マクーは、山奥にあるんですよ。そういう行けるもんじゃありませんよ」ライが苦笑しながらそれに答える。

「ああ、そうか……。それじゃ、三人とも海は初めてか

「ええ……まあ……」

「もつと、深いところに行つてみますか

ライは、そうこうと、どんどん深いところ潜つていく。

「あつ、ちよつとまつてよ」

キリアが慌てて追いかけよつとするが、慌てれば慌てるほど、進まない。見かねたロゼは、泳ぎ方を教えた。

「キリアさん。足を曲げないでゆっくり動かして、手を前の水をかき分けるように動かしながら、進んでください」

「あ、進んだ進んだ。ロゼ、教えるのうまこいね。実は、海に来たことあるんじゃないの?」キリアはニシ「コトとロゼに微笑みかけた。

「えつ……ないと想いますけど」ロゼは、自問自答をする。海に来たことがあるのか。

最近では、なかつたよつたな気がする。

では、昔は?

「……

思に出せない。

どうしてだらう。

ロゼは、自分の頭を軽く叩いた。

思い出せ……。思い出せ……。

「うわー、なになに、この魚！きれい！」

キリアは突然、黄色い魚を指差して、歓声を上げる。

「ああ、それは、キイロチャントルという魚です。他にも、赤、だいだい、黄緑、緑、青、紫の色があつて、群れになつて泳ぐさまは、虹のようです」

「へえー…………」魚をさわろうとするキリア。

「ですが、気を付けてください。地上とはちがつて、大きいものが強いのではないのです」

「どういうこと？」

「小さいものが強いのです。集団となつて、大きな魚を食料とします。それに、頭もいい」

「そんなこといつても、大きいほうが、強いに決まっているわよ」「いいえ、そうではありません。小さい魚には、鋭い牙がありますし、大きい魚には、それがあります。小さい魚は、大きい魚に食べられそうになつたら、すばやいでですから、すぐに逃げることができます。大きい魚はその分、水の抵抗が大きいですから、追いかけることは無理です」

「ほー、くわしいね。それじゃあ、大きい魚は、何を食べているわけ？」

「海藻です」

「なるほど」

キリアは、海水の中で、腕くみをしながら、大きくなづいた。なぜ、こんなにも、くわしいのだらう。またロゼは自問自答をする。

本で読んだから？

誰かに聞いたから？  
いや、ちがう。

そんなこと、記憶にない。と、こいつひとせ……。

実際に見たからだ。

ロゼは、ゴクリと、つばを飲んだ。

「おそこよ」ライがいつの間にか戻ってきて、ロゼとキッタの手を引っぱった。

「着いてきて。見つけたよ、住居跡」

19

「うつ、わあー」

キリアは、感激していた。

海の中に、人が住んでいたなんて。あの話は、本当だつたんだ……。

石の階段がある。

壁があつて、部屋になつていてる。

これは、ベッドかな。

でも、石だからよく眠れないだらうな。

あ、このホールみたいなところで、集会とか開いていたんだろうか……。

うわひ、ここにはすべり台があるーすじーちょっとすべつてみよつかな……。

泳ぎながら、夢中になつて石の町並みを見ていたキリアは、ふと、足元に何かがあることに気が付いた。

「あれ？」

岩のかげに隠れていて今まで気が付かなかつたが、足元に、十数輪の花が、ゆらゆらと揺れていた。

「きれい……」

どうしてここに花があるのだろう。

キリアは考える。

さつや、ロゼは、小さい魚のほうが、大きい魚より強いといつようなことを言つた。

ここでは、反対のことが起きるのかもしれない。

普段、土に根を張つて生きている花たちが、海で生きているんだ。

うん、きっとそう。

摘んでしまおうかな。

いや、きれいだから、そのままにしておこう。

ふと、ライとロゼがないことに気がついた。

一人になると、急に心細くなるキリアは、一人の姿を探した。

「あ、いた」ちょうど、石の壁に隠れて見えなかつただけだつた。キリアは、この中で一番年上なのに、あせつている自分を恥じた。二人は、並んで、下を見ているようだつた。その視線の先には：

「…………花だ」今見た花よりも、ずっときれいな花が、揺れていた。

20

「わたしが、チリカだったのですね……」ロゼは、石の町並みを見ながら、言った。

ライが、見ると、ロゼのほほに涙が伝っていた。

「すべて、思い出しました」ロゼは、ニッコリと微笑んだ。

「ライさん、あなたは、魔法でわたしの頭の中を見る前に、分かっていらっしゃるのでしょうか？」

「うん……。いや、正確には、いいえ、かな……。魔法で見て、確信が持てたから」

ライは、歩きながら、ポツリポツリと話し始めた。

「最初に変だなって思つたのは、ロゼ チリカが、カーニャの家の前で待つていたときなんだ。家に着くまでには、全身がドロドロになるくらい大変なんだけど、チリカはそうじやなかつた。そのあと、足が浮いているからだつて思つたけど、それで、解決できるのは、足だけなんだ。手とかに、必ずドロが付くはずなんだよ。だから、魔法を使つてきれいにしたのかなと、思つた。知つてた？ 魔法をつかつたあとつて、ほんとうに集中しないとわかんないんだけど、かすかな匂いがするんだ」

「あら、そうでしたの」ロゼ チリカは微笑んだ。

「そう。そのときは、なにも匂いがしなかつたから、魔法も何も使つていなかつたんだ。これが、最初に変だなって思つた部分。でも、よく考えてみると簡単なんだ。チリカは、カーニャに、魔力を分けてもらつたでしょう？」ライは、微笑んだ。

「よく、ご存知で」チリカも、微笑んだ。

「カーニャが、客を外に待たせておくなんてありえないことなんだ。いくら人使いが荒いといつても、そこまでひどくはないよ。チリカも、聞いたろう？僕にカーニャが、魔法で話しかけてきて、『

クウクに行け』って言つたとき。客を外に待たせて置くほどのやつが、アドバイスなんかするかな？僕は、しないと思うよ。弟子より客のほうが、大切に決まっているもの。だから、僕が帰つてくる前に、チリカを家の中に入れたんだ。カーニヤは、大魔法使いだからね。見ただけで、すぐ、チリカの記憶がなかつたロゼを、海の神だと知つたんだ。そして、記憶がないことも知つた。自分がマクニの住人だと思い込んでいることも知り、カーニヤは、チリカに気づかれないように魔力を分け、体のドロを魔法で落として、外で待つているように命じた。そして、うさぎのトラップを作つてゐる僕に、魔法で呼びかけたんだ。『客が来ているから、早く帰つて來い』つてね。カーニヤは、魔法を使つた。だけど、匂いがしなかつたんだ。どうしてだか分かる？あのとき、カーニヤは薬草を煮詰めていただろ？そのときに魔法の匂いか、薬草の匂いに負けちゃつたんだよね』

「なぜ、カーニヤさんが、わたしを外に出したか、分かります？」

ライは、数分考えたのち、首を横に振つた。

「あなたは、負けず嫌いで賢いわ。だけど、なにか足りないものがある。そうでしょう。カーニヤは、それを心配した。だから、わたしの悪夢の正体を突き止めると言い、旅に出させたのよ」

ライは、肩をすくめると、「チリカ、ロゼのときどづいぶん口調が、変わつたね」と言つた。

「さあ、続きを話して」チリカは微笑んだ。

ライは、もうここにいるのは、ロゼじゃないんだと思った。

「カーニヤがチリカに魔力を分けた そう考へると、あとの疑問はすぐに解けたよ。さつき、カーニヤが、『クウクに行け』と、魔法で話かけてきたことを話したね。あのときも、疑問があつたんだ。話をすることが出来るのは、二人だけ。どうして、チリカが僕らの会話を、聞くことが出来たのか、と。それは、カーニヤとチリカは、魔力を分けたと言つても、共有していしたことと同じなんだ。どちらかが、魔法を使えば、もう片方にも影響が出てくるんだ。聞

「えるのは、当たり前だね」

「そうだったのですか……。わたしもあの時は少ししげしげだったんですよ。魔法を使つていないので、どうして、聞こえるのだろうか、とね」

「あとはね、キリアさんのテストだったんだ。ほら、題名と作者、出版日を答えるやつ。題名と作者まで、覚えているのは分かるよ。でも、出版日まで覚えるかなあ、そもそも、三歳で、出版日を見る子なんか見たことないよ。あのときは、魔法を使つたんでしよう?」

「ええ、でも、匂いで分かるのでは?」

「あのときは、僕も、本を探すために魔法を使つていたからね。魔法を使うときにできる匂いは、みんな一緒なんだよ。甘い、ハチミツの匂い」

「…………ああ、だから、キリアさんに熱心に「一緒に来てくれ」ってお願いしていたのですね。わたしの化けの皮をはがすために」

「うん、そう。キリアさんは、ちゃんとテストするために、出版日まで聞いたんだと思つてた。だけど、本当に驚いていたからね。」

「すごいなあ、ロゼは」「って」

「そりゃ、キリアさんは、本当にわたしを、試したんだと思ひますよ」

「うーん、そーカナ。まあ、いいや。それで、このことから、ロゼは、なんかおかしいなって思った。そのときは、悪夢とは別問題だつて思つていたけどね。チリカの頭の中を見て初めて、ロゼとチリカはイコールで結ばれたんだ」

話し終わつてライは、チリカを見た。

チリカは、海水によつて音は聞こえづらいが、割れんばかりの拍手をしていた。

「それじゃ、今度は、チリカの番だよ。どうして、カーニャの家を訪ねたのか。あの夢は結局なんだつたのか」

「まず、あの『海の中の住人たち』の本の内容を、訂正しなければなりませんね。最後に、チリカの魂は、あまりにも住人を思う

気持ちから、神となりました』の部分だけれど、わたしは、神ではないわ。今でも、カリトの長、チリカ・ロゼです。そして、死んでもいい。今でも、ここに住んでいるわ

「それじゃあ、どうして、陸に上がれたの？」

「あのとき、わたしは、悲しくて、死んでいつた住人たちのように、陸に上がって、死のうとしました。だけど、この海には、カリトだけではなく、まだ区域がたくさんあるのです。その人たちが、また陸に上がるうと考えたら、大変なことになる。そう考えたわたしは、『先読み』をしました。もう、一度としないと決めた、『先読み』をしたのです」

チリカは、いつたん言葉を切ると、遠くを見て、また話し出した。「すると、数時間後のわたしの姿が見えました。数時間後のわたしは、ある言葉を唱えて、指先から、一輪の花を出したのです。そして、その花を海底の砂に埋めると、そのまま水面に顔を出したのです。そのわたしは、なんともなく、岸まで泳いでいつて、歩き始めました。わたしは、すぐ、その方法を試しました」

「その数時間後のチリカは、どうやって、花を出す方法を知ったの？」

「数時間後のわたしは、『先読み』を使って、また数時間後わたりを見たのでしょうか」

「……………それじゃ、チリカが花を出す方法を、数時間前のチリカが見たということですか？」

「ええ、おそらくそうだと思います。その方法で、陸に上がったわたしは、自分が海から来たことを忘れていました。おそらく、その花に、記憶を吸い取られたと考えます。そして、なぜが、マクニに行かなくては。そう思ったのです」

「足を浮かせて歩いていたのは、海と陸では、重力が違うから、歩くのが大変だったからですか？」

「その通りです。海からきたことを、覚えていませんでしたから、なぜ歩くのがこんなにも辛いのか、とてもふしきでした」

チリカは、クスリと笑うと、足元を指差した。

「これが、その花です」

ライは、花を見た。

それは、どんな色にも判断できないふしきな色を持つ、とても小さな花だった。

「きれいだね」

「ええ……」

「ええ……」

しばらくの沈黙の後、チリカは言った。

「この花を、わたしのところに戻すには、どうしたらよいでしょう?」

「『先読み』で見てみては?」

「ああ、そうですね」チリカは、ニッコリと笑うと、『先読み』を開始した。

ライは、そのあいだひまなので、花をじっとみていた。

「ライ!」キリアの声が聞こえた。

「今まで、どこに行っていたんです?」

「そこら辺を、見てた。すごいよ、すべり台とかあった。あ

れ、ロゼは、なにしているの?」

キリアはまだ知らないんだった。

ライは、思い出した。

あとで説明してやらなければ。

なにせ、一を知つたら百まで知らないと気がすまないようだから。

「分かりました」チリカが、『先読み』を終えていた。

「この花を……」花をつみとるチリカ。

「食べるそうです」チリカは花を口に入れた。小さいので、一口ですむようだ。

「ええっ、なんで食べんの?」キリアは目を丸くしている。

「それは、あとで説明します。それよりチリカ、これからどうする?」

チリカは、三つあみにしていたひもをほどいた。カールしたブロ

ンドの髪があらわれる。それは、あの絵本の表紙の人物だった。

「あ…………もしかして、ロゼがチリカだったとか？」キリアは、

引きつった笑顔をチリカに向けた。

チリカは二ヶ『リと微笑んだ。

「わたしはこれから、海の中のほかの区域をまわって、陸に上がる方法と注意すべき点を説明しようと思います」

「ああ、それがいいと思うね。記憶がなくならずに、陸に上がる方法とかを研究したりとかするのもいいかもね」

「それはいいですね。『先読み』でそれが可能か見てみますわ」

チリカは微笑んだ。

「それでは。…………ああ、カーニャさんにもうった魔力を、お返ししなければいけませんね」

「いや、カーニャに返す必要はないよ。カーニャの魔力って、それこそ、売るほどあるんだから」

2  
1

「そうだったの」

キリアは、海を見ながらつぶやいた。

ライは、海から上がって、浜辺に座りながら、キリアに説明した。今度は、「はあー」だの言わなかつたので、短時間ですんだ。

「それじゃあ、結局あの夢は、なんだつた訳?」

「たぶんだけど、ロゼが感じたあの重い空気は、海水だったと思

うよ。空気より、水だと音が聞こえにくいからね」

「ふーん」キリアは、貝がらを拾いながら、返事をした。

「結局は、あの花がロゼに夢を見せていたんだと思うよ」

「へ? どういうこと」

「キリアさんも、分かっていたでしょう。ロゼのときと、チリカのときは、口調がちょっと違つたでしょ。それは、花に記憶だけではなく、カリトの長としての人格も吸い取られていたんだと思うよ。その人格が、ロゼにチリカのことを思い出して欲しくて、夢を見させていたんじゃないかな」

「なるほどねー。って、ライも、あたしに対する口調が変わつてない? ちょっと今まで、敬語だつたような気がする」

「あ、そうだった? キツと、『氣のせいだよ』

「そうだったかなあ」

「そうそう」ライは、クスクスと笑い出した。キリアも笑い出す。しばし、二人は笑いあつた。

「そりゃ、あの『センター・カロ』は、どうして、カリトの話を知つていたんだろうね」ライが、思い出したように言った。「センター・カロ? 誰、それ? キリアが首をひねつた。  
「忘れたの?『海の中の住人たち』の作者だよ。カリトは、チ

リカ以外全滅したんでしょう？だれも知らないはずだよ」

「ああ、そういえば、そうだね……」

キリアは、うでを組んで考えはじめた。

「そう、たとえば、死んでいったカリトの人たちの魂みたいなのが、力口コさんに乗り移つて、絵本を書いた……とか」

「ないない」ライは、笑いながら、首を振つた。

「それじゃあ、カリトは全滅したわけじゃなくて……、何人かは生き残つていって……、それが力口コさん……とか」

「ないない」

「そうかな。今のは、けっこつ自信あるのになあ」

「うーん、さっきのよりは、全然いいけど、ありえないよ

「そうかなあ」

さつきまで、サンサンと照つていた太陽が、海に飲み込まれようとしていた。

まもなく夜になる。

だが、地面に日が当たるのは、もうすぐそこだ。

1

元に戻っている。すべてが、なにもかも。  
死んでいった動物たちも、すべてが元通りになつた。  
木々は、空に向かつて、突き刺さんばかりに背伸びして。  
花は、やさしい風にさわられて、いきますぐにでも、ワルツを踊り  
だしそうだった。

その光景は、昨日見た、リンと同じ。  
まったく同じ。

あらしが、去つたあと、マクニーの少年ライが、ほどこじした魔法。  
それはそれは美しいものだった。  
シャルゴは、今まで見てきたマクニーの魔法の中で、最高に美しい  
ものだと思った。

あのすばらしい声。もう一度聞きたい。  
小鳥のさえずりのよう? いや違う。  
風のささやき? 違う。

もつといつ すべてを、包み込むような、やせしー声。

すぱらしかつた。ほんとうに。

だけビ。

ちがうんだ。

シャルゴは、奥歯をかみしめた。

『先読み』が。

何の役にも立たなかつた。

どうして？

他の区域にはない、『先読み』を使えるリンが『先読み』を失敗するなんて。

今までになかつた。こんなこと。

『先読み』がリンからなくなつたら、何がのこる？  
ただ単に、木を育ててているだけじゃないか。

それは、それでいい。

だけど。

リンにとつて、『先読み』は誇りだつた。

そもそも、『先読み』は、今あつた、あらしなどの自然災害を前もつて知るためのあると、考えられている。  
それが。

ライの魔法で、すべてが否定された気がした。

『先読み』なんかなくても、魔法があれば、リンを守ることが出来る。

そんなことを、あの魔法で言われた気がした。

確かに、そうかもしねない。

でも、ちがう。

自分の身は、自分で守りたい。

リンは、リンの住人が守るんだ。

確かめてやる。  
確かめてやる。

どうして、『先読み』が失敗したのか。

あの、ロゼとかいうマクーの少女の悪夢退治なんて、わへ、どうでもいい。



2

「…………シャルゴ、じつに来るのじゃ」

「じいちゃん……」少しあつれたような気がする。シャルゴは、シャルントのうしろ姿を見ながら、そう感じていた。

シャルゴは、シャルントの後について、家に入った。木で出来ている家。一時期、全壊状態だった家。

シャルントは、木製のイスに腰を下ろすと、黙つたまま、空中をにらんでいた。

シャルゴは、台所へ行き、一人分のサルツシユという疲れが取れるとされる飲み物を、コップに注ぎ、シャルントの前のテーブルに置いた。

「ああ……、ありがとう」

黙つてサルツシユに口をつける一人。

「…………」

黒い液体が、半分ほどになつたとき。

「ふう、やはりサルツシユは、苦いのひ」コップをテーブルの上に置くと、シャルントは、口を開いた。

「宝玉が、なくなつたんじや……」

「えつ……」シャルゴは、口を開けたまま、しばらく動けなかつた。

「どうか……。『先読み』が失敗したわけは、これだつたのか……。

宝玉とは、五十以上あるとされる区域一つひとつを、守るとされる石だった。その石は、区域の長によって大切に守られてきた。

その石がなくなつたからといって、その区域の力がなくなるわけではないが、シャルントは、『先読み』が失敗した理由が、このことにあると感じていた。

リンの宝玉は、球体で、透明な中につすい緑色の光が泳いでいた。

大きさは、直径三センチ。

重さは、髪の毛一本分ほど。

その宝玉が、保管されている場所は、リンの長、シャルントしか知らない。

「いつからなくなつたの?」シャルルは、気を取り直すと聞いた。

「うむ……。今日の朝にはあつた。眞にもあつた。夕方に見たら……なかつた」

今は、深夜である。

「ふーん。どこに置いてあるの? 宝玉は?」

「それは、教えるわけにはいかん」

「……教えてよ。いずれ、オレがじーちゃんの後を引き継いで長になるんだろ」

「ダメじゃ。それは、引き継ぐときには教えるもんじゃ」

「……それじゃあ、なんで、オレに宝玉がなくなつたことを言つたんだよ」

「おまえが、次の長になる予定じゃからな」

「だったら、場所を教えろよ!」

「ダメじゃ!」

シャルルは、ため息をつくと、サルツシューを一口飲んだ。

「……あらしで、どつかに飛ばされたんじゃないの。軽いん

だし」

「いや、それはない。厳重に縛つてあるからの」

「ふーん」

シャルルは考える。

あらしの被害を受ける対策をしていふことは、恐らく外だ。

「雨とかに打たれて、流されたりとかは？」

「いや、木々に守られているから。雨に当たることはないよし、これで、外に宝玉があるということが確実になった。

シャルゴは、ほくそ笑んだ。

木々に守られているといふことは、木よりも、下の場所にあって、地下ではなく、地上にあるといふことだ。

「なんか、葉っぱとかで包んでいたりしたら、誰かが持っちゃうんじゃないの？」

「それもなこのう。石の玉座に神々しく飾つてあるから、だれも、わらんじやろう！」

「へ？」

まさか、あれが、宝玉の場所だったとは。

シャルゴは、自然に、「ちょっと外に行つてくる」と行って、ドアを閉めるなり走り出した。

シャルゴがいなくなつた家の中で、シャルントはサルツシユを飲んだ。

「ふう、あいつに、宝玉の場所を教えるのも大変じゃわい。長を受け継ぐときに、場所を教えるのが規則じやからう。これで、あいつが偶然にも宝玉の場所を知つてしまつたことに、なればいいがのう」

「……」「……」

コンのはずれの山奥に、ひつそりとその主をなくした玉座があつた。

確かに、木に守られている。が、その守られるものは、今はいない。

「どうして今までこじだと気づかなかつたんだろう」シャルゴはつぶやいた。

山奥とは言つても、シャルゴは結構ここに来ていたからだつた。

隠してこる宝玉をこんな丼立つといひに置くはずがないといつ先

入觀からか。

「…………」

シャルゴは、石の玉座の周りを見よつとしたが、真つ暗で何も見えなかつた。

「…………ん？」なにか、甘いにおいがする。

これは……。

「なんだらう……」シャルゴは考える。

さつきまで氣付かなかつた。

深夜で何も見えなくなつた今、視力の変わりに嗅覚が敏感になつたのだろう。

花や木の蜜の匂いではなかつた。

いつも嗅ぎなれている匂いとは違う。

でも、どこかでかいだ匂い。

「…………あつ！」

思い出した。

ライが使つた、あの美しく、すばらしかつた魔法。

あのとき、ライの声に聞きほれて氣がつかなかつたが、確かに、匂つていた。

これと、同じ匂い。

もしかして、魔法を使つたときに出る匂いなのか。もしくは、ライの愛用している香水かなんか。

「ライが、宝玉を取つたのか？」いや、リンについてから、ずっと

とシャルゴはライと行動をともにしていた。あらしがくるまでは。

「そうか、ライが、魔法であらしを起こし、リンの住人があわてているすきに、宝玉を…………」

なんてやつだ。

シャルゴは、奥歯をかみしめた。

「どうりで、『先読み』が失敗したはずだ！ 魔法で、いきなり起

こしたあらしが分かるもんか！ 『先読み』は失敗していいんだ！」

シャル『は、急いで、シャルントがいる家に向かって走った。  
はやく、シャルントにこのことを知らせて、何とかしてもらわな  
ければ！

3

「あー、それはない」話を聞くとシャルントは、首を横に振った。  
 「どうしてさーライが持つて言ったんだろー!」

「ライはのう、カーニャの弟子じやぞ。カーニャとは子供のとき  
 からの付き合いじやが、それはそれはしつかりした奴じや。そいつ  
 の弟子に限つて、宝玉を盗むはずがない」

「そんなことない!…………オレ、ライを探しに行く。捕まえて  
 やる!」

「まあまあ、早まるな」

「やだ!」

「やだって、言われてものう

「明日に備えてもうねるよー!」言つが早いがシャルントは、寝室へ  
 と向かつていった。

「ふう、しようがないのう

シャルントは、イスからゆっくりと立ち上がると、自分の分ヒシ  
 ャルゴの分のコップを取り、台所で洗い始めた。

次の日の朝。

「本当に、行くのかの」

「うん、必ず、宝玉を取り戻しに行くよー!」

「ライが、持つているとは、思わんがのう

「そんなことない!あいつは、悪い奴なんだからー!」

シャルントは、ため息をついた。

「どこに行くつもりじや?」

「マクニ。ライの師匠のカーニャつて人に会つてくる

「ほう。気を付けるんじやぞ」

「うん」

「…………」

甘かつた。

カーニャの家に行くまで、こんなにも大変だとは。

頭のてっぺんから、足の先まで、どろどろになっていた。

「うわっ。なんでこんなところに、つさぎのトラップがあるのさ」「しかもなんかぶかつこうなトラップ。シャルゴは泥まみれになりながらも、クスリと笑った。

横を向きながら歩いていたので、なにか硬いものにぶつかった。

「ああ、ガケだ……」目の前にそり立つ岩の壁を見て、シャルゴはため息をついた。

4

「ふむ、ライが、なぜそんなことをするとと思うのかね」  
カーニャは、ゆったりとしたイスに座りながら言った。  
黒いローブをはおつていてるせいか、シャルゴにはカーニャがとても大きく見えた。

シャルゴが、カーニャの家についてから、一言もまだ話していないのに、いきなり質問をされた。きっと、思考を読んだのだろう。「石の玉座の辺りから、甘い匂いがしたのです。ですから……」

…

言い終わらないうちに、カーニャが口を開いた。

「わたしの魔法を見せてあげよう。おいで」そうこうと、カーニャは、スッっと消えた。

「え、おいでって、どこへ行けば……」

シャルゴは、カーニャが座っていたイスに近づいた。

「あつ！」

イスの周りに、ほのかな甘い匂い。その匂いは、石の玉座の周りにあつた匂いと同じ匂いだつた。

「わつ！」

シャルントが、イスを凝視していると、先ほどを同じように、ス

ッとカーニャが現れた。

「分かつたかね」

カーニャは、ニヤリと笑つた。

「はい……」

シャルントは、深呼吸してから言つた。

「あなたが、宝玉を盗んだのですねー返してくださいー」

カーニャは、あきれて言葉も出なかつた。

「ええ！魔法使ひは、魔法を使ひたら、全員同じ匂いを発するんですか？」

「そう、だから、魔法を使って消えて見せたの。これじゃあ、口で言つたほうが早かつたわい！」

「ははは……すみません」シャルントは、軽く頭を下げた。

「とにかく、ライじやなくとも、魔法が使えるつまり、マクーの人が、リンの宝玉を盗んだのですね」

「そうとは限らん」

「……どうこうことですっ？」

「ライのやつが、あらしで全壊状態のリンを魔法で元に戻したんだろう。そのときの匂いかも知れん。余計なことをしたもんじや」

「ああ……なるほど。でも、家に帰つてから、何の匂いもしませんでしたけど」

「石の玉座の前では、集中していたからじやない？」

「そんなもんですかね」

「そんなもんじや」

「それじゃあ、これからビリすればいいでしようか？」

「ふむ、そうじやの？……」カーネヤは、じまびへ皿をつぶつたあと、いり言つた。

「リンに戻つて、よく探してみたらいつかの？」そして、軽くウインク。

おばあさんが、ウインクをするなんて、なんかかっこいいな。

シャルゴは、クスリと笑つた。

「それじゃあ、リンに帰ります」

「ああ、気を付けて」

家の外に出て、シャルゴは、あることを思つて出した。

また、あの道を通りて、帰るのか……。

シャルゴは、深く、ため息をついた。

5

やつとひやが、コンの家に帰ると、シャルロは、倒れこんだ。

「つ、疲れた……」

「おうおう、『苦勞』じゃったな。だいじゅつた。ライじゃなかつたわう」

「うん……」

「やはりな、やうだと思つたわい」

シャルントは、ヒヨヒヨヒヨと笑つた。

「宝玉がなくなつたのに、よく笑つていられるな……」

シャルゴは、祖父に微かな殺氣を覚えた。

「見つかつたぞ。宝玉」

「ええっ！」

シャルゴは、カバツと起き上がると、石の玉座に向かつて、走り出した。

家に残されたシャルントは、「まさか、ライが、魔法でリンを戻すときに、あらしで転がつた宝玉を、戻し忘れていたとはなあ。玉座にちゃんと縛り付けておいたはずなんじゃが、あらしで吹き飛ぶようではだめじやのひ。まあ、近く草むらの影に止まつていたから助かつたがのう」と言つて、ヒヨヒヨと笑つた。

「あつた」それは、石の玉座の上に、チョコンと乗つかつていた。シャルゴは、その場になへなへと座り込んだ。

「それじゃあ、どうして、じいちゃんの『先読み』が失敗したんだ？」

きっと、風邪でも引いていたんだろう。

シャルゴは、草むらに寝ころんだ。

『先読み』をしてみる。

近い将来、リンに別の世界から一人、人間がやつてくるのが、見えた。

そのとなりには、ライがいた。

またライが、自分を振り回すのだろうか。

シャルゴは、『先読み』をやめた。

青い空に白い雲。木が青々と茂つていて、小鳥の鳴き声が聞こえる。

風が、ほほをなでた。

気持ちがいい。

それでいい。

シャルゴは、ライが来るまで、この気持ちよさを、ぞんぶんに味わうこととした。

1

今日は、まつたくもつて、ついていない日だ。恵美はやつ断言で  
きた。

コンビニから家に帰る途中だったのに。  
なぜだか、知らないところに来てしまった。  
近道しようとしたのが、行けなかつたのだろうか。  
ちょっと、そここの林を抜けて、すぐ家だったのに。  
いつものように、ちょっと遠回りになるけど、道路を歩くんだつ  
た。

なに? ここの家は。  
まったく、タイムスリップでもしちゃつたのかな。  
三回のこぶたの長男が建てたような家。  
おおかみが、フーって、吹いたらすぐ、飛んでいつてしまいそ  
な家。

ワラつていうのかな。そんなので出来ている。

恵美は、恐る恐る、その家に近づいた。  
話し声が聞こえる。

恵美は、耳をしました。

「じんなのも分からんのか。……じやから、『ラルシユソウ』を  
つんで来いと言つたんだ。これは、『ガルタンソウ』じゃろうが。  
ちゃんとつんで来い」年寄りの声が聞こえた。

「ええー、カーニャ、もう夕方だよ。じきに、夜になるよ」孫だ  
らうか、子供の声もある。

「だからなんだ。はやくつんで来い!」

「はいはい」

「つちこちづこてぐる音がする。

恵美は慌てた。

どこかに隠れなければ。だが、あたりに隠れられそうなどころはない。

「あれ？ お客様？ 見慣れない人だねえ。ささ、入って入って」

気付かれてしまった。

恵美は、自分と同じくらいの少年に進められるまま、三匹のこぶたの長男が建てたような家に入つていった。

2

「ふーん、そう。道に迷つたんだね」少年はライといつた。  
恵美は、進められるがままに、イスに座り、ここに来たい  
を話し始めた。

「コンビニって、なに?」

「…………はい?」

ちょっと待つてよ。

恵美は信じられなかつた。

わたしとだいだい同じ年つてことは十三歳くらゐよね。中学一年  
で、コンビニを知らない人がいるとはね……。

「まあ、何でも売つているお店屋さんかな」

「ふーん、そななんだ」ライは神妙な顔でうなずいた。ウソをつ  
いているようではなかつた。

恵美は、ライの後ろに座つていて、老婆が氣になつて仕方がなか  
つた。

着ているのは、確実に魔法使いの話で出てくるローブ。

鋭い目と、とがつた鼻が、いかにも魔女らしい。

その魔女が、口を開いた。

「なんだい、わたしのことが気になるのかね。人間界のお嬢ちや  
ん

きや。

恵美は、飛び跳ねそうになつた。

思考を読んだわ。それに対し、恵美は、もしゃ、こ  
こは魔界!?

「いいや、ここは、マクー。魔界の連中とは違つたぞ」

「で、でも、魔法使いなんでしょう?」恵美は、恐る恐る魔女に  
聞いた。

「いかにも。わたしは、魔法使いのカーニャ・ストロンティアルだ。こいつは、孫ではなく、わたしの弟子だ」ライを指さして、カーニャが言った。

「魔法使い……。本当に？ あ、あの、魔法を使って見せて」「よろしい

カーニャは、指をパチンと鳴らすと、スッと消えた。

「わっ……、消えた」

「どうだい」見えないのに、カーニャの声が聞こえた。

「す、すごいです！」

また、パチンという音が聞こえて、カーニャの姿が現れた。

「ライ、この少女に、こここの世界を案内しなさい」

「えー、どうして？」

ライは、ほほをふくらせた。

「この世界に、人間界からの訪問は、二十年まえにあつたきりだ。とっても珍しい者なんだぞ」

「案内したからって、なんになるのさ」

「いいから行け。マクニではなく、リンやクウクに行け

「またこのパターンか……」

ライは、ため息をついているが、恵美は、ワクワクしていた。魔法の世界が見られる。なんてすばらしいんだろう。

今日は、まったくもって、ついている日だ。恵美はそう断言でき

た。

3

リンはとつてもすばらしいといふだ。

恵美は、嬉しかった。

人間界から来たというだけで、長のシャルントから、手厚いお出迎えがあつたからだ。

「これ、おいしいですね」恵美は、赤い木の実を、ほおばりながら言った。

「そうじやるつ、そうじやるつ。人間界には、ないのか？」

「ええ、ないです。似たようなもので、リンゴがありますけど。でも、こっちのほうが、甘い」

「ほう、リンゴとな。一度食べてみたいもんじゃわい。 シャルゴ、シャルゴ！ ライとばっかり話してないで、こっちにたくさん、木の実を持つてくるのじや」

「はいはい」

シャルゴと呼ばれた少年は、ライと共に、たくさんの木の実をテーブルに置いて、イスに腰掛けた。

「リンのみなさんも、魔法が使えるんですか？」恵美は、微笑みながら言った。

魔法の世界だから、当然だろつとは思つたのだが。

他の三人は、一瞬顔を曇らせたような気がした。

「い、いや、リンの住人は魔法を使えないんだ。ただ、『先読み』があるけどね」ライが、微笑みながら答えた。

気のせいか、恵美にはすこし、ライが青ざめているような気がした。

「…………『先読み』ってなんですか」

少し、空気が重くなつたが、気になつてゐることは、聞きたい恵美だった。

「ああ、未来が分かることだよ」シャルゴが答えた。

恵美は、シャルゴが思っていたよりも高い声なので、びっくりした。

「へえ、それは、すごいですねえ。あ、その『先読み』を、やつてもうえたら嬉しいなあ。わたし、いつ人間界に帰れるのかつて恵美は、いくら、魔法の世界が好きだとしても、やはり元の世界には帰りたいと思っていた。

「ああ、いいじやろう」シャルントは数秒の間、目を閉じていた。目を開くと、「今日中には、帰れるじやう」と言った。

恵美はすこしガッカリした。元の世界には、帰りたいが、一日じゃ短すぎる。

「ええ！今日中ですか。それじゃあ、はやくクウクに行かなきや。カーニャになんて言われるか」

「オレも行く」

シャルゴが、イスから立ち上がった。

4

「クウクのみなさんは、すごいですねえ」

クウクの『飛び』を間近でみて、恵美は感激していた。

「なあ、ライ。さつきからこいつ、すごいとしか言つてないぞ」

「まあ、そういうお年頃なんでしょう」

ライとシャルゴの会話がうしろから聞こえるが、恵美は無視していた。

背中に羽が生えているなんて、妖精みたい。

しかも、羽の色が一人ひとり違つていて、きれい。これが十人十色つてやつね。

「わあ、あの人羽、すごくきれい」恵美が指さした人は、濃い青色の羽を持つ少女だった。

「ああ、キリアさんだ」

ライが、恵美のそばに立つて言つた。

濃い青色の少女は、ライの声に気付いたようだ。こつちに降りてくる。

「ライ。久しづりね」ライの前に立つて、ニッコリと笑うキリア。

「そこの方は?」キリアは恵美に気が付いて言つ。

「恵美っていう、人間界から来た奴。こつちはリンのシャルゴ」

「こんにちは」

「こんにちは。へえー。人間界からか。はじめてみた」

キリアは恵美をジロジロと見る。

恵美も負けじとキリアを見た。

羽の色と同じ、濃い青色のショートヘア。

目がパツチリとして、鼻は高くもなく低くもなく、整つた顔だつた。

きれいじゃなくて、かわいい感じの人だ。

恵美はそう思つた。

「キリアさん、クワクを案内してやつてよ」

「オッケー。まかして」キリアは、恵美にパチンとウインクした。

それから、恵美は、いろいろなものを見た。

中央に立つ三本の木。

時計のように並ぶ、十一軒の家。

その家の中。

書斎。

本がすきな恵美は、その部屋に釘付けになつた。

「へえ、本がそんなにすきなのね」キリアが微笑みながら言つた。

「はい、とつても」

「それじゃあ、次に行くところは決まりね」

「ああ、サクリカ」

「そう、あたし、一度行つてみたかったのよ」

「自分が行きたいのか」ライは、軽くため息をついた。

「まあね」

「オレも、ずっと行つてみたかったな、サクリ」シャルゴが言つた。

「サクリってどんなところですか？」

「行ってみれば分かるさ。つて、ぼくたち、一度も行つたことないけど」

ライは、首をくぐめた。

5

「着いたはいいが、どこにいく?」ライは、サクリに着くなり言った。

「もあね」と言しながら、キヨロキヨロとあたりを見渡すキリア。シャルゴも、無言であたりを見渡していた。

恵美も見てみる。

一瞬、人間の世界に戻つてしまつたかと思つほど、いく一般の町並みが広がつていた。

木造二階建ての一軒家があれば、八百屋さんがあり、肉屋さんがあつた。

ただ一つ、違つてゐるものといえば、サクリの中央にそびえたつ、たてにも横にも大きい、ドーム状のレンガの建物があるくらいだ。

「とりあえず、あそこについてみるか

ライが、指さしたさきには、あの大きな建物があつた。

「近くで見ると、迫力満点」キリアが恵美の頭ぐらいの高さまで浮きながら言つた。

「サクリ図書館だつて」シャルゴが看板の文字を読む。

「図書館か……、入つてみるか

重い戸を開けると、壁一面に本がつまつていた。

ここは、本好きに取つての天国だ。と恵美は思つた。

中央には、らせん階段が、六本ほど延びてい、一階へとつながつていた。

一階へ上るうとすると、近くにいた人に呼び止められた。

「一階には、本はないよ

「それじゃあ、なにがあるのさ」キリアが聞く。

「作家さんたちの創作場だ。お前さんたち、編集さんかなんかか

い？」すると、キリアは、一步前に出て、微笑みながら話を始めた。

「ええ、そうです。この人。ツェンター・カロコの編集さんですわ。あの、カロコさんは、どちらにいらっしゃるのかしら」キリアに背中を押され、前に出る恵美。

どうやら、恵美がその編集さんらしい。

恵美は、あわてて、目の前のサクリの住人に、引きつった笑顔を向けた。

「カロコさんのかい。それは、失礼。場所は、階段の『5』って書いてある所から上ると、一番近いよ」

言つが早いが、その人は、本棚のほうへ歩いていった。

「はあ、びっくりした。キリアさん。何してくれるんですか」恵美は胸をなでおろした。

「あはは、ごめんごめん」キリアは頭をかきながら、笑つた。

「でも、ツェンター・カロコの場所が分かつてよかつたじやない

「だれですか。その人」

「まあ、とにかくあつて見ましょうか。『海の中の住人たち』の作者に」

『5』と書かれた階段を上ると、壁に向かって、机がズラツと並んでいて、等間隔に、壁が立ててあった。どうやら、それぞれ個室になつているらしい。

階段側にある廊下を歩いていくと、その個室一つひとつに、一人のサクリの住人が、頭をかきむしったり、本でなにかを調べていたり、ペンを持つて書いていたりしていた。

ドアがなく、となりを仕切る壁しかないので、廊下を歩けば、すべて丸見えだつた。

「マサラ・コンツエール…………サラク・ミタゴラーヨ…………ライが、天井からくさりでぶら下がっている、板の文字を読み上げながら歩いていた。

どうやら、作家さんの名前らしい。

「…………ツェンター・カロコ…………」などだ！

そこには、黒い髪が、腰の辺りまでまつすぐに伸びた女の人が座つていた。

「この人が…………」声がするほうを恵美が見ると、キリアが唾を「ゴクリ」と飲んでいた。

「ええ、わたしが書いたわ。『海の中の住人たち』を。でも、どうしてここまで来たのかしら」革張りのゆつたりとしたイスに座りながら、カロコは話した。よどみない、きれいな声だつた。

「それはですね……」ライは、恵美の知らない話を始めた。ロゼという少女のこと。

悪夢の中のチリカのこと。

その悪夢の根源を見つけるために、いろいろなところに行つていたこと。

リンであつたこと。

クウクで『海の中の住人たち』の絵本を見たこと。  
ロゼの頭の中を魔法で見たこと。  
海の区域、カリトへいったこと。  
ロゼが、チリカ本人だつたこと。

海の中の花のこと。

それが終わつてから、恵美という人間がきたこと。  
カーニャに、この世界を案内しろと言われたこと。  
そして、ここまで来た経緯。

「そう……」

一通り話を聞いたあと、カロコはしばらく、宙をにらんだまま動かなかつた。

「なぜ、あなたが、カリトのことを知つていたのですか？ 創作ではない。これは事実です。そのことを、ぼくらは知りたい」

ライは、黙つたままのカロコに聞いた。

恵美も、知りたかつた。

今聞いた、冒険が本当なら、なぜこの人は知つているのだろうか、と。

「わたしは、カリトの住人でした」  
カロコは静かに、語り始めた。

力口コは、もともとカリトに住む、リンであった。

いつも冷静沈着。何事にも、考えて行動する性格だった。

力口コだけではなく、リンの住人はたいてい、同じ性格をしていた。

みなが、地上に出たいと言つていたときも、力口コを含む、リンたちは、地上に出たらどうなるのかを『先読み』で調べてみた。  
『先読み』で見えたのは、みなが砂浜で、もがき苦しむ場面ではなく、カリトの長チリカがある呪文を唱えて、指先から花を出し、地上に出て行くというところだった。

力口コたちは、チリカのように『先読み』が達者ではなかつたので、自分の見たい未来を見ることが出来なかつたのである。

地上に出ることを反対していたチリカが地上に出た、という未来がみえた力口コたちは、安心して、他のマクニやクウクに地上に出ても安心だ。ということを伝えた。

マクニやクウクはそれを信じて、地上へ飛び出していった。

力口コと共に、『先読み』をしたリンの人たちも、地上へ行つた。力口コと数人の仲間たちは、地上にはあまり興味がなかつたため、カリトに残り、みなが帰つてきて、土産話を持つてくるのを、楽しみにしていた。

ところが、いくら待つても、誰も帰つてこなかつた。

そんなにも、地上は楽しいところなのだろうか。

カリトに帰つてきたくないぐらいに、楽しいところなのだろうか。

力口コたちは、相談の末、自分たちも、地上に出てみるとこにした。

一体どんなところなのだろう。力口コたちは、ワクワクしていた。そのときである。

すすり泣きが聞こえた。

力口コたちは、泣き声のするほうへ行つてみた。

岩かげから、そつとのぞいてみる。

すると、チリカが、長く美しい髪を振り乱して、泣いていた。

どうして泣いているのだろう。

力口コたちが、顔を見合わせたそのとき。

チリカがある呪文を唱えて、指先から花を出し、地上へ行つてしまつた。

そう、『先読み』で見た、あの光景と同じだつた。  
残された力口コたちは、急いで、チリカと同じことをして、地上へ上がつた。

そこで見た光景は、おぞましいものだつた。

たくさんのかリトたちが、浜辺で息絶えていたのである。

力口コはふしげに思つた。

どうして自分たちは、平氣なのか。

そして、チリカはどこへ行つてしまつたのか。

よく考えてみると、自分たち以外のかリトは、花を出していなかつた！

そうか……それで。

力口コたちは、いたたまれない罪悪感にみまわれた。

どうして、チリカが花を出したことを、ふしげに思わなかつたのだろう。

どうして、他の住人にそのことを言わなかつたのだろう。

自分たちだけが、助かつて、良かつたのだろうか……。

やつと、チリカが海の中にいたときに、泣いていた理由が分かつた。

そして、なかなかかリトが、帰つてこなかつた理由も。

力口コたちは、浜辺で、大量の涙を流した。

ごめんなさいと何度もつぶやきながら。

物音がして、力口コは顔を上げた。

そこには、チリカがいた。

フラフラとして、今にもたおれそうだった。

「チリカ……！」カロコは、チリカの元へ走った。  
地上では、思うように体が動かなかつたが、なんとかチリカの所へ着いた。

「あなた……、どちら様ですか？わたしは、チリカではあります  
ん。ロゼです」

チリカは記憶をなくしていた。

呆然としているカロコを無視して、チリカはマクニーのほうへと去つていった。

カロコは、浜辺に戻ると、チリカが記憶をなくしていることを話した。

だが、自分たちでは、どうすることもできない。

海という、住みやすい環境に戻るか。

カロコたちは話し合つた。

結果はすぐに出た。

そんなことは、してはいけない。

それに、海に戻つたからといって、一体何があるのだろう。  
何もないじゃないか。

一番住みやすいが、一番住みにくい場所だ。

カロコたちは、浜辺で別れた。

十数人。一塊になつても、なにもできやしない。

だいいち、カリトがこんなことになつたのは、自分たちのせいだ。  
固まつて、生きている資格なんてない。

カロコは、クタクタになるまで歩いた。  
歩いて、着いた場所は、サクリだつた。

サクリの親切な住人に助けられ。  
カロコは、今こうして、サクリの住人になった。

「絵本を書いたのは、チリカが読んで、記憶を取り戻してくれた  
ら、と思ってね」

「どうして、最後のほうを、チリカが神になつたと、書いたので  
すか？」ライが聞く。

「チリカが、記憶をなくしたといふことが、信じられなかつたか  
ら。微かな抵抗だと思つてちょうどいい」

「なぜ、チリカの記憶がなくなつたとお考えですか」

「恐らくは、チリカが、自分で記憶と人格を、花に吸い取らせた  
んだと思うわ。無意識のうちにね。とても、責任を感じていたんだ  
と思うわ」

「あたし、見たよ。力口口さんたちの花。とってもきれいだつた  
……」キリアは、その光景を思い出したのか、目を細めていた。  
わたしも、見てみたいな。

恵美はそう思った。

「力口口さんの生き残つた仲間たちは今、どうしているんですか  
？」

ライが、また質問をする。まったく、疑問がたえない人だ。

「さあ、分からないわ。みんな元気で生きているといいけど」

「そうですか……。ああ、お忙しいのにお手数をおかけしました。  
それでは、もう、帰らせていただきます。ありがとうございました」

「いいえ、こちらこそ、ありがとうございます。チリカの記憶が戻つたと分  
かつて、すつきりしたわ」

恵美は、力口口の個室から出る前に気になることを聞いた。

「もう、海へは、戻らないのですか」

「ええ、もう、一度とないわ……」

カロコは、いつたん押し黙ると、言った。

「でも、たまに戻るのも、いいかもしないわね」

「はい、戻られたほうがいいと思います。罪滅ぼしだって、ちゃんととしていると思いますし……それに……」

「それに？」

「だって、あなたは、カリトの住人なんですから」

カロコは微笑んだ。今までの中で最高の笑顔で。

9

「あそこの林に向かつて、一気に走つて」  
みんなから一足遅れて図書館から出ると、シャルゴが百メートル  
ぐらい先の林を指さして言つた。

「え？ どうして？」

「さつき、シャルゴに『先読み』をしてもらつたんだ。したら、  
あの林に向かつて走つたら、人間界に戻れるってさ」

「早くしないと、戻れなくなよ！」シャルゴがせきたてる。  
「バイバイ。楽しかったよ」キリアは微笑んで手を振つた。  
「えつ、でも」

「早く！」

恵美は走り出した。

でも、ひとつ、気になることがある。

「ねえ、どうして……シャルゴが見た未来では、わたしは林  
に向かつて走ることになったの？」

恵美は、走りながら叫んだので、息が切れそうになつた。  
「それはねー」後ろからライの叫んでいる声が聞こえた。

「シャルゴが『先読み』をしたからだよーー！」

「えーー！ そんな、堂々巡りなのー？」

「そうだよ。でも

「林に入った。

「でも」のあとは、なんだつたのだろう。

恵美は、考へているうちに、元の世界へ帰つてきていた。  
たまに通る、見慣れた林。

恵美は、足を止めて振り返つた。

そこには、さつき行つたコンビニの照明が光つていた。

「戻ってきたんだ」

腕時計を見ると、夕方の六時になっていた。

「二時間しかたつてない…………」

こっちだと、時の流れが遅いのだろうか。

何だったんだろう。と恵美は思う。

二時間なんて、とっても短くて、忙しい旅行だったな。でも、よかつた。楽しかった。

10

今日は、まったくもって、ついている日だ。恵美はそう断言できた。

3・09 & 3・10（後書き）

お久しぶりです。

この作品は、某出版社の新人賞に応募して、見事に落ちてしまった作品です。

読んでみてぜひ感想、評価をお待ちしています。

今後の創作に役立てたいと思いますので、ぜひお願いたします。

それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6527c/>

---

透明な階段

2010年10月11日03時36分発行